

『源氏物語』「光る」 仏教の世界

『源氏物語』は、主題とされる「もののははれ」と人生の苦しみや悲しみを法華思想、浄土信仰から見つめた作品である。主人公・光源氏の生涯は予期せぬ出会いと別れに翻弄され、仏教が説く「四苦八苦」の一つ「会者定離（えしやじょうり・この世は無常であることの意味）」の苦しみの連続であった。そして、光源氏と関わる姫君たちもまた、世のはかなさを憂い、法華思想と浄土信仰に救いを求めてゆく。

平安時代は仏の教えが薄らぎ、世の中が乱れる「末法」の世に入ったとされ、極楽浄土を願う浄土信仰が台頭した。また、花山法皇が始めた西国三十三所巡礼に代表される観音信仰も盛んになる。

『源氏物語』の中でも「夕顔」巻の清水寺（京都市）、「浮舟（うきふね）」や「蜻蛉（かげろう）」巻に描かれ、紫式部が琵琶湖の湖面に映った満月を観て作品の着想を得たとされる石山寺（大津市）、「宿木（やどりぎ）」や「手習（てならい）」両巻の長谷寺（奈良県桜井市）等、名刹が物語の舞台となる等、平安貴族の生活には仏教が深く根付いていた。

紫式部も仏法に深く帰依した人生観を次の和歌にしたためている。

「世の中を なに嘆かまし 山桜 花見るほどの 心なりせば」。
世の中をどうして嘆くことがあるう。山桜を花見する気持なら。

